

思いやりのこころ

鳥取大学医学部4年（鳥取県）

小坂 真由

「他人をあなどることなく、いつも思いやりが先にたつように」

毎週のお稽古終わりに、この言葉を口にするたびに今日のお稽古ではどうだっただろうと考える。

茶道部に入部して4年、茶道を始めて同じく4年。感染症が流行し始めた頃に入部し、感染症とともに歩んできた4年間であった。多くのお茶会が中止になり、普段のお稽古すらその拡大を鑑みて中止になることも少なくなかった。このような状況は、茶道にいそしむ上では不運としか言えないかもしれない。しかしこの状況だからこそ得られたものがあるように感じるのも確かである。

感染症の影響を鑑みて大きなお茶会はほとんどが中止になった。そんな中でやっと思われたお茶会は、当時、部を運営してくださっていた先輩方が様々な工夫のもと開催してくださったものであった。お客さんとして招待するのは、お世話になっている先輩であったり、可愛い後輩であったり、はたまた尊敬する先生方であったりと様々であったが、共通しているのは皆が皆、私にとってかけがえのない人である、ということである。見知った人々に囲まれて行うお茶会を重ねるということは新鮮さに欠けるという点が欠点であるのかもしれない。しかし、茶道を始めてあまり時間の経っていない私にとっては、余計なことを考えずに茶道に、そしてお客様に向き合う良い機会であった。亭主を務めることになったあるお茶会で、襖を開けた先にみえる先生方、そして先輩方の姿に、自然と手をつき、頭が下がって礼のかたちをとっていたことを覚えている。どうか、忙しい日々の合間を縫ってきてくださる親しい方々に、この一時だけでもゆっくりとした時間を楽しんでもらえるように。日常で交流する中で、彼らがどれほど忙しい日々を送っているかを知る私の中で、そのような思いが生まれるのは必然だった。それが茶道でいう「思いやり」の一つではなかろうかと思いついた時に、浮かんだのが冒頭の、「他人をあなどることなく、いつも思いやりが先にたつように」という言葉であった。

この言葉の示す思いやりについて自分なりに答えを見つけた。それと同時に、私は「他人をあなどることなく」とはどういう意味なのだろうと考えた。多くの場合、「あなどる」という言葉は競争相手など、競う相手に対して使われるように思う。しかし、茶道では違うだろう。この中にはお客様に対する意味が含まれているのではないだろうか。お客様を決して軽視するな、軽んじるな、そういう意味ではないだろうか。部活動を含め、様々な場面で、技を磨いて他者と競うことが意義とされることが少なくない。したがって、「あなどる」と言えば、もちろん競争相手をあなどるな、という形で使われる様子が浮かぶ。しかし、茶道部においては、前に述べたように、他者は競う相手ではない。

もてなす相手、そして思いやりを示す相手とされる。私はその在り方がとても好きだ。競争は決して悪いことではなく、物事の進化のために欠かせないものだとして理解はしていても、それ

でもたまに疲れてしまう私に、茶道は優しく寄り添ってくれる。誰かを思いやり、もてなすことこそが第一だというその精神に救われるような気持ちになることさえあった。

今、世の中は一つの節目を終えたように、少しずつ変化しようとしている。町中でマスクを外した姿で闊歩する人の姿は、少し前までは考えられなかったものではあるけれど、そのさらに前へ遡れば当たり前だった光景である。そして、それと同じように、かつてあったお茶会がやっと開催を許されるようになり、多くの初めて会う方々を、お茶を通しておもてなしすることができる兆しが少しずつ見え始めた。

私達が感染症とともに歩んだ4年間は、きっと無駄ではなく、これからのお茶会を、そして茶道をよりいっそう色鮮やかにしてくれると私は信じたい。そしてこの4年間、親しい人たちと創意工夫の上で開催してきたお茶会の中で磨いた、「思いやり」の精神を、初めて出会う方にも向けられるこれからのお茶会がとても楽しみでたまらない。

「他人をあなどることなく、いつも思いやりが先にたつように」

この言葉を胸に、これからもお稽古に励んでいきたいと思う。